

中学校から帰宅するとメイはぐったりとベッドの上にうつぶせになりベッドサイドに現れた光に向かって話しかけた。

「アモン、またユイナちゃんとケンカした」

光は小さなカラスの頭をした人間の姿になると、はあ。と深くため息をついた。

「おい。お前は一体何回ユイナというやつとケンカをするんだ？」

「だって・・・」

「人間はケンカをして仲直りをするのでさらに仲良くなると聞いたことがあるが？」

「それはウソだよ。仲直りをしても気まずいものは気まずい」

「今回のケンカの原因は何だったんだ？」

「推しが被った」

「・・・推しというのは、確かお前が好きなアイドルのことだったか？」

「そう。ユイナちゃん推しが自分と同じだと嫌だったタイプだったみたい」

アモンはため息をつきながら額に手を当てた。

「推しが被るのが嫌とは・・・人間とはかくも奇妙なものだな・・・」

「アモンの世界では推しが被るのはありなの？」

「私の世界では好きなものが共通していることは大いに結構なことだ。まあ、ファッシュョンで他人と被るのが嫌というやつならいるがな」

「それ誰？」

「さあな。お前が我々についてよく調べない限り教えてやることはできない」

「なにそれー。いつもそうやってごまかそうとする」

「ごまかしているわけではない。我々の世界のルールだ」

そう言いながらアモンはメイの鼻をつついた。

「私に言わせればこうやって知り合ったのにも関わらず全く私たちについて調べようとしないお前が悪いんだ。今まで何人も人間と一緒に暮らしてきたが、大体の者は異端の書だろろうが何だろろうがちやんと我々について調べたぞ」

「私だって調べたでしょー？」

そう言いながらメイがベッドの上にごろりと仰向けになると、アモンは額をつついた。

「ネットで私について調べただけだろうか？他の者たちはどうした？」

「だってー、ソロモン・・・柱だったっけ？」

「ああ」

「柱も調べなきゃいけないとかってうざいー」

アモンははあ。と深くため息をつく。と、再び額に手を当てて首を横に振った。

「お前がああ、ブランの生まれ変わりなんてとてもじゃないが思えない」

「ブランって、前にアモンが言っていた私の前世？」

「ああ。お前は物凄く優秀な王の補佐官でな、私の能力をいつも戦略のために生かしていたんだぞ」

メイはごろりと仰向けになるとアモンをじっと見た。

「ねえアモン、私の前世ってどんな人だったのか教えてよ。それなら大丈夫？」

「・・・お前の記憶の中にはフランスに関することがあるから、それなら大丈夫だぞ」

アモンは足を組むと、メイの前世について語り始めた。